

Z会東大進学教室

一橋大世界史



3章 東西ヨーロッパの成立 I

添削課題

解答例

ドミナトゥスを維持するための権威として、キリスト教の神を利用しようとしたコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認し、テオドシウス帝により国教とされた。教義の整備も進み、ニケーア公会議でアリウス派、エフェソス公会議でネストリウス派、カルケドン公会議で単性論が異端とされ、アタナシウス派の三位一体説が正統教義として確立した。カルケドン公会議では五本山の中でローマが首位権を持つことが決定した。しかし、実際にはローマ帝国はキリスト教世界として一体化したとはいえなかった。ゲルマン人が侵入した帝国西半ではアリウス派が、シリア・エジプトでは単性論が信仰されていた。4世紀以後、帝国西半で都市が衰退する中でコンスタンティノープルへ遷都され、5世紀に西ローマ皇帝が退位すると、東ローマ皇帝と結んだコンスタンティノープル教会が首位権を主張してローマ教会との対立が生じるなど、当時のローマ帝国の支配は不安定であった。(398字)

解説

《4～5世紀の地中海》

問題文が長ったらしく何を書けばいいのかがよくつかめないのが一時期の一橋世界史の特徴であった。最近はこちらまで回りくどく問うことはなくなったが、これくらいの問題の読み解きでギブアップしてははどうにもならない。

指示代名詞が何をさしているかを見抜くことが大事なことは「国語」の基本だ。「その現実」は決して単純なものではなかった」の部分の「その現実」が何を意味しているのかを、自分なりにつかまなければならない。次に「その分裂の事態」で何の分裂なのかをつかむこと。この2つを踏まえて、問題文の前半をいい換えると次のようなものになる。

キリスト教は4世紀末にローマ帝国の国教となった。しかし、本当に国教になったといえるのであろうか。それはキリスト教といってもさまざまな教義があるし、キリスト教会も組織面から見て完成されていないからである。

問われていることは、上記の事情を「ローマ帝国の政治・社会状況に即して」述べることだが、ここでもまだ山はある。「政治・社会」が何を意味しているかということだ。

「ローマ帝国と東方属州地域との政治的関係に触れること」という副次的要求について。この部分は出題者には悪いが正確な表現ではない。東方属州はローマ帝国内にあるのだから、「ローマ帝国と東方属州」というように並置できない。筆者ならば「その際、東方属州地域に注目すること」というくらいにぼかしておく。因みに、東方属州地域と聞いてシリア・エジプトに単性論が広がっていることを思い出せば（指定語句にあるから思い出すことはたやすい）十分である。結局、問題文の最初の部分の読み解きができるかどうかにかかっているということだ。

最後に、大きな流れをまとめてみる。ドミナトゥスについて触れながらアタナシウス派キリスト教がローマ帝国の国教になる話をする。もちろん、その過程で異端が排除される話、ローマ教会が首位権を持つようになることを明記すること。次に「しかし」と前文を否定して、実態について語っていく。西ローマが滅亡したことで、コンスタンティノープル教会が首位権を主張すること、異端を排除したといいながら、ゲルマン人（アリウス派）や単性論が帝国内にいることを書けばよい。

これだけ書ければ本番では高得点がもらえるはずだ。

4章 東西ヨーロッパの成立Ⅱ

添削課題

解答

フランク王国は843年にヴェルダン条約で三分された。のちのドイツとなる東フランク王国、のちのフランスとなる西フランク王国、そして中部フランク王国である。870年には中部フランク王国が断絶したことで、東フランク国王ルートヴィヒ2世と西フランク国王シャルル1世の間で中部フランク王国を分割するメルセン条約が結ばれた。この条約でエルザスとロートリンゲンの大部分は東フランク王国に属することになり、のちのドイツとフランスの係争の地となった。東フランク王国では911年にカロリング朝が断絶した後は、国王は諸侯の選挙で選出されることになり、フランケン公コンラート1世に次ぐハインリヒ1世がザクセン朝初代の国王となった。このころ、ノルマン人やマジャール人の侵入が激化していた。ハインリヒ1世はこれを撃退したのみならず、諸侯の勢力の強い東フランク王国の統一に努め、初代神聖ローマ皇帝となる息子オットー1世が王位を継いだ。(399字)

解説

《東フランクの発展》

カール大帝の死後、フランク王国が分裂し、そのうち、東フランクに神聖ローマ皇帝が登場するストーリーだけで400字も書けるはずがない、というのが大方の見方であろう。指定語句の「マジャール人」「ロートリンゲン」の使い方も難しい。「ロートリンゲン」に至っては、受験会場で初めてこの語句を見た人も多かったようだ。

アルザス・ロレーヌがフランスとドイツの係争地として長い歴史をもっていることは19世紀以降の歴史で確認することではあるが、この「アルザス」「ロレーヌ」のドイツ語読みが「エルザス」「ロートリンゲン」であることを知っていても、やはり、この問題ではどのように使えばいいのかは困るところだ。

次に、「神聖ローマ帝国の初代皇帝となる国王の選出にいたるまでの期間」とあるが、これでは東フランク国王でオットー1世が即位するまでであって、962年に神聖ローマ皇帝となるころまでは問われていない。つまり、オットー1世が東フランク国王についてのは何年なのか、といったことを含めて、非常に細かな知識を要求している。

試験問題としては明らかに悪問の部類に入る。問題文が難解で意味不明なわけではないが、高校での学習内容を把握していないためにこのような出題がなされているのだろう。確かに一橋大学は中世ヨーロッパについて頻度が高いことは間違いないが、これほど細かな知識を必要とする問題はほとんどないだろう。このような出題がなされたら、とりあえず、何かを書いておくしかない。

なお、解答については、解答例と同じものを書く必要はない。東フランク王国でカロリング朝が断絶してからの話は、一見して書けそうで書けるものではない。マジャール人と聞いたら

レヒフェルトの戦いでオットー1世に撃退されることが有名だが、これは955年の出来事であり、オットー1世が東フランク国王に就くのが936年のことなので、この使い方はできない。

エルザスとロートリンゲンが東フランクに帰属することは、図説の地図中で現されているものもあるため、何かを参照しながら解答する分には使えない語句ではないが、試験会場ではやはり難しいだろう。

5章 中世ヨーロッパ

添削課題

解答例

中世都市が享受していた「自由」とは、農村を治める封建領主の支配を受けず、自治権を持っていたことを表している。領主裁判権に服さず、独自の都市法によって治められていた。また、都市はこれを維持するために、同盟を結成して封建領主に對抗した。都市の自治を担うのは、当初はギルドを構成する大商人層であったが、ツunft闘争を経て手工業者の親方が作る同職ギルドも市政参加の権利を得た。しかし、職人や徒弟といった身分はギルドに入ることはできず、親方の隷属的な地位に置かれていた。さらに、ギルドは経済活動を細かく統制して自由競争を禁じており、個人の自由や経済活動の自由といった近代的意味における自由があったわけではない。(300字)

解説

《都市の空気は自由にする》

この問題の解答を作成する上で最大のネックになっているのは300字という字数だ。これとまったく同じ問題でも、字数が100字・150字・200字であればさほど気にする必要はない。ところが300字となるとかなり字数が余る。もちろん、細かなことを何かの本を見て写せば300字になっていくのではあろうが、それは意味のない行為だ。因みに、現行の市販されている世界史教科書では上記の解答を作ることもできない。それは「どのような意味を有していたか」という部分について、言及のないものがほとんどだからだ。とはいえ教科書に載っていることだけで入試（とりわけ一橋大世界史入試は）に立ち向かえるであろうはずもなく、知らなかった者はこの問題を通じて記憶に留めておいてもらいたい。

もし、この問題が100字なら上記の解答のどこを削ることになるのか、150字・200字ならどうか、それぞれ試してもらいたい。持込み不可の実際の試験では、200字書くことができれば十分である。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--